

母の 690 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

谷口広樹さんを偲んで／上條喬久、アーサー・ピナード 2
耳で聞く小さなおはなし⑫「ホンのちょっぴり」／村中李衣、石川えりこ 3
こども食堂ってどんなところ？／湯浅誠 4
わたしの原風景④／中川ひろたか 6
新刊紹介／森下みさ子 7
イラスト／みやこしあきこ



玉子スープ

最上一平

息子は大学生のころ、ママチャリで北海道をめざして旅をした。小さなテントを持っただけの旅だが、岩手だったか青森だったかで、民家に泊めてもらったという話を聞いた。その時、ああ、いい旅をしたんだなあ、と思った。

困っている時に、何気なく差しのべてくれる手ほどあたかきものはない。旅の醍醐味は、そういった出会いにあるのかもしれない。そして、それは体にしみるものだと思う。例えば、息子が大人になって、難儀をしている若者に会えば（それは昔の自分でもあるのだろう）、声をかけるのではないだろうかと思うのは、親の欲目だろうか。

ずいぶん昔、私がまだ独身ででたらめな生活を送っていた時に、こんなことがあった。バイトが見つからなかったのであろう。お金がすっからかん（こういう時の連続であった。今でも）。悲慘のピークを想像してください。場所は練馬のオンボロアパート。4畳半の共同便所。あろうことか、私は強烈な風邪をひいて3日ほど起き上がれなくなった。

アパートの前の道をはさんで、目の前にあまりきれいとはいえない中華屋さんがあった。ほどほどに安くて、味もおいしかった。時々ではあるが、ここでラーメンや野菜いため定食を食べることがあった。私は暗い性格で人見知りだったから、話などはしたことがなかったのではあるが、マスターの言葉の端ばしになつかしいなまりを感じていた。どういういきさつかは忘れたが、マスターは山形の天童の出身であることがわかった。私は同じ山形の朝日町がふるさと。出身が同じだからといって、親しくなったわけではない。その後も客とマスターの関係だった。

3日間寝込んだ私は、これはヤバイ、なにか食べなくてはと思い、小銭をかき集めて這うように中華屋さんに行った。マスターが「どうしたの？」と聞いたので、「風邪をひきました」と答えた。私はラーメンを頼んだ。ラーメンと一緒に、ワンタンやエビやキクラゲなどが入った玉子スープを出してくれた。「これサービス。早くなおせ」といって。

あの時は嬉しかったなあ。そんなふうに関心する人々に世話になり、何とかかんと生きてきたようだ。

コロナ禍でもあり、いじめや貧困、虐待、その他にもいろいろとあって、大人も子どもも大変な時代だ。今こそ玉子スープのあたかきが必要な時ではないだろうか、思ったりする。

（もがみ いっぺい／児童文学作家）

猿の記憶

上條喬久

唐突な訃報に驚かされ、残念、残念としか言い様がなかった。もう一月経ったのに残念な気持ちが消えず、残念で仕方が無い。彼を偲んで七百字という注文である。今の気持ちは、七百字全てを残念、残念と埋め尽くしたいくらいで、偲んでという気分になれない。それでは、読む人に迷惑だから、谷口広樹に関する「残念な出来事」をいくつか紹介してみようと、気を取り直す。彼に初めて会ったのはもう四十年以上前である。昭和天皇のよつだ、が第一印象だった。昭和天皇が崩御された頃から、昭和天皇似の面影も薄くなり、最近ではすっかり貴族がついて、懐かしき昭和が消えたことが残念。

人の方が多いだろう。

手元に「芒格礼の庭」(光琳社)という彼の作品集がある。一九九四年で、谷口広樹著になっていて。私の最も好きな作品で、これを受け取った時に、谷口康彦だったらもっと似合っていたのにと、少し残念に思ったことを改めて思い出した。

そして、突然の訃報である。嗚呼、康彦に帰ったのだな、と思った。六十四歳とは余りにも早すぎる。広樹でいいから、成熟した未知の作品を見たかった。残念で仕方が無い。

最後に電話で話したのは七月十四日だった。最近の作風を評価し、褒めてしまった。シマツタ、褒めなければ反発力が生命力になっていたかも知れない。残念で仕方が無い。

(かみじょうたかひさ/グラフィックデザイナー)

谷口広樹さんを偲んで



イラスト/谷口広樹(本誌609号より)

全身画家

アーサー・ビナード

愛おしい丸が描ける人。くるくると線を回し、見事な渦を広げるのも得意だ。丸の内側をくるくるしぼっていき、美しい臍(へそ)を表現するのも、この画家の独壇場。

谷口広樹さんのそんな才能を、ぼくは知っていて、強く惹かれていた。それなのに、言葉にできなかった。「おもしろい絵だね」とか、本人に漠然とした感想は話したが、どこがどうおもしろいのか、細かく語り合う機会を逸した。

谷口さんの筆から生まれるものは、説明を必要としない。理屈より深い感覚とつながり、常識の範囲におさまることなどない。ぼくらの体内にひそむ喜怒哀楽の源を、彼は探し当てようとしている感じがする。言語に頼らない。でも、もしその感覚と響き合う言葉が見つければ……と、ぼくは思い、

いっしょに絵本を作ることに決めた。

ただ、その前に、丸木俊さんと丸木位里さんの絵をもとに紙芝居を作った。二人の絵を、谷口さんはデザイナーとして生かし、素晴らしく発展させて、二〇一九年にやっと『ちっちゃいこえ』が完成した。それから去年、いわさきちひろさんの絵をもとに絵本を作るプロジェクトが始まり、谷口さんのデザイン力を当てにしていた。完成した瞬間には、今度ぼくらの創作に集中しようという約束を交わしたのだ。

向き合うもののエネルギーを、全身で感じ取り、全身に行き渡らせて表現する画家だ。考えや意志などを外すことができる。つまり自分の殻をかなぐり捨てて、本当に純粋な感覚から出発して、自らの個性を超えていける。そんな個性に支配されない才能が、谷口広樹さんの個性かもしれない。ほかの画家の作品と向き合う場合も、まず体内にその絵を宿し、全身でデザインを進めるのだった。

ぼくは谷口さんのすごさを正確に捉えていた。しかし人生の時間軸が読めなかった。ちひろさんの絵を生かす仕事のあとに、二人で創作を始めればいいと、悠長に構えていたのだ。自分を消すことができる表現者がいきなり消えるとは、想定していなかった。残された絵と今、ぼくはただただ向き合っている。

(詩人)

耳で聞く小さなおはなし⑫

「ホンのちょっぴり」

文・村中李衣 絵・石川えりこ

どんぐり・どんぐり・どんぐり

雨上がりの夕暮れ。待ちくたびれたお母さんのお迎え。三歳くらいの男の子が、紺色の通園バッグをおしりのあたりで弾ませ、傘をぶんぶんぶん、長くつをカッポカッポと鳴らして、歩いていきます。おかあさんも、男の子の横を黙って歩いていきます。道の前方に大きな水たまりがみえました。男の子は、薄暗い空を見上げて、おっきな声で歌いだしました。みんなの知ってるあの、「どんぐり・どんぐり」のうたです。

そうそう、木から落っこちたどんぐりが、ころころと転がって、お池にはまってしまっただよね。

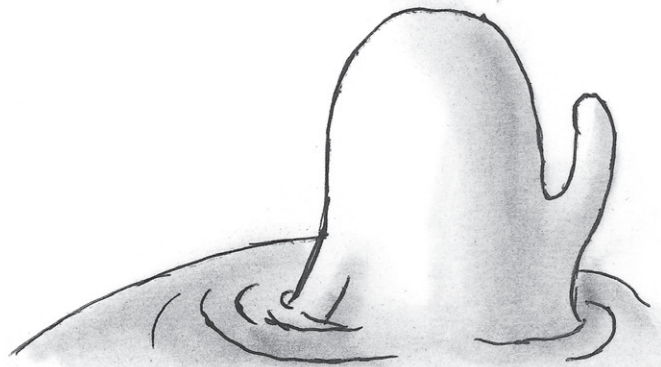
そうそう、おもいがけず、そこで、意外な生き物と出会うんだよね。

かわいくたどたどしい歌声を私もふんふんと聴いていたら、いきなり、

「こぞうができて、こんにちば〜!」

ええっ? なに? こぞうと出会うの?

私の驚きの声が聞こえたのかしら。歌っていた男の子も、パタッと歌うのをやめました。水色の傘の柄をぎゅうっとにぎって、しばらく考えている風でしたが、やがて、ひざっこぞうをお母さんの方へ向けて「こわいねえ」。



するとお母さんも男の子のほうを向いて「こわいねえ」。もう一度男の子が「こぞうとか、こわいねえ」。

お母さんは、そんなわが子をぎゅうっと抱き寄せて「こうやって帰ろうか?」。男の子の顔がぱあっと明るくなって「うん」。しっかりとついて歩いていく二人を見送りながら、逢魔が時に、水たまりから手を振る一つ目小僧の姿がちらりと見えた気がしました。

『ぼっとなころころどんぐり』にも、いろんなどんぐりたちが登場します。木から落っこちるどんぐりたちを今か今かと待っているのは、かけすやひめねずみ、にほんりす、それに、つきのわぐまのおやこたちまで。

絵本のページをめくりながら、どこかにまだまだ見えない生き物たちが、「こんにちば」の瞬間を待っている気がします。



ぼっとなころころどんぐり
いわさきゆうこ・さく

こども食堂って どんなところ？

湯浅 誠

ゆあさ まこと ● 1969年生まれ。社会活動家。東京大学先端科学技術研究センター特任教授。全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長。90年代よりホームレス支援に従事し、2009年から3年間内閣府参与に就任。内閣官房社会的包摂推進室長、震災ボランティア連携室長など。著書に、『「なんとかする」子どもの貧困』（KADOKAWA）『反貧困』（岩波書店／第8回大佛次郎論壇賞）『つながり続ける こども食堂』（中央公論新社）など多数ある。

いま、日本各地で「こども食堂」の活動が広がりを見せています。

「こども食堂」はどのような役割を持ち、なぜ人をひきつけるのでしょうか。

NPO法人むすびえ理事長や大学教授として、

幅広く活動している湯浅誠さんに言葉を寄せていただきました。



ある父親が、こども食堂に「子どもたち三人を預かってほしい」と頼んできた。父親はトラック運転手で、夜間自宅にすることが少なかった。夕食はいつも、母親が三人の子と格闘しながら食べさせていた。父親はいつもそれを申し訳なく感じていた。

妻の誕生日が近づいていた。夫は、いつも奮闘している妻をディナーに連れ出そうと思った。そのためには、子どもたちを預かってくれる人がいる。そこで右記の依頼となった。

——こども食堂とは、父親がいつもがんばっている妻を^{お祝い}するために、妻を誕生日ディナーに連れていけるようお手伝いをするところ、だ。

あるインドネシア国籍の小2の女の子がいた。彼女は他の子とは違う自分の国籍、自分の名前に引け目を感じ、学校では日本名で通っていた。

あるとき、こども食堂で自分の母親が参加者にインドネシア料理を振る舞った。その日、母親は「スター」だった。母親が参加者に対してインドネシアの文化・風習を伝えるプチ講座をやっているとき、

彼女は母親の下に駆け寄って、自分にもインドネシア名があるんだと「カミングアウト」した。彼女はそれから学校でも本名を名乗るようになった。

——こども食堂は、外国籍の女の子が自分の母国と名前に自信をもてるようになるところ、だ。

「こども食堂ってどんなところ？」と聞くと、多くの人が「食べられない子が行くところ」「ひとり親家庭が行くところ」などと答える。そういうこども食堂もゼロではない。が、多くのこども食堂は、地域の人たちが集う「地域ひろば」として機能しており、そこでは右記のような出来事が日々繰り広げられている。もっと「ふつう」の人たちが、もっと「多様な」体験や経験をする場である。

かつての自治会の「子ども会」のように。

こども食堂を主宰する人たちが作りたいののは、いわば「公園のような場所」だ。公園は誰が行ってもよく、入口で年齢も家族構成も所得もチェックされない。思い立ったら、誰もがフラッと立ち寄れる。一人で過してもいいし、誰かとおしゃべりしてもいい。そうした「みんなに開かれた場所」、それがこども食堂だ。

それゆえ、「こども食堂」という名称がよくないのでは、「こ」とおっしゃる方がい

る。一理ある。こども食堂とは「こどももオケ―食堂」なのだが、少なからぬ人は「こども専用食堂」と誤解する。いっそのこと、「みんな食堂」「地域食堂」という名前にしたほうがミスリーディングにならない。だが、「誤解されることがあったとしてもこども食堂と名乗りたい」という主宰者も多い。ある主宰者は私にこう言った。『みんな食堂やるから力を貸してください』と呼びかけたときに地域の方たちから引き出される力を一〇〇とすると、『こども食堂やるから力を貸してください』と呼びかけたときに引き出される力は二二〇にも一五〇にもなる』と。「子どものため」と思えばみんなが一肌ぬいでくれる。だから仮に子ども一人であっても、「こども食堂」と言いたい、と。現場のリアリティとはそういうものだろう。

こども食堂で子どもたちが得るのは食事だけではない。私が参加者から一番よく聞く言葉は「ここではたくさんの人と知り合える」だ。参加者は、こども食堂の「つなげる力」に一番の魅力を感じて集まっている。地域みんなに開かれた場所なので、そのつながりも縦横無尽だ。子どもが高齢者と触れ合うことで、立ったり座ったりするのが大変な人がいるん



イラスト／みやこしあきこ

だと学ぶ。高齢者が子どもと触れ合うことで、元気をもらう。母親たちが、地域や学校、保育園や医者などについて情報交換をする。ボランティアがあやしてくれている間にママ友と話を笑かせる。育児の先輩に愚痴を聞いてもらったり、

アドバイスをもたらしたりする。中学生・高校生が下の子に頼られることで責任感を育む……。保育園や学校が子どもだけの場所、介護予防体操などが高齢者だけの場所になっていることを考えると、地域にそのような場所が実は少なく、貴重

であることに気づく。

「何かあったらどうするの?」と言って、私たちの社会は人との関わりに慎重になり続けてきた。リスクを挙げ始めればキリがなく、人ときあうのはやたらと負荷の高いことになってしまった。ポチッと押せば買えないものはない、という便利さがさらに拍車をかけた。だが、人ときあうのは面倒なことだが、つきあわなさすぎるのも寂しいものだった。だから人々はネットにつながりを求めたが、それで埋め切れるものでもなかった。ガチガチのしがらみは嫌だが、SNSだけでも物足りない。人々のそうした感覚に背中を押されて、こども食堂は短期間に五千人所まで増えた。年間の延べ利用者は七百六十万人だ。

こども食堂は、さびしくなった地域、薄れてきた縁、少し行き過ぎではないかというくらいに強くなったリスク意識が生み出した私たちの地域と社会の課題に応える活動だ。人々はこのような場所を求めており、だから行政が旗振りしてないのに、短期間に全国津々浦々に生まれた。コロナ禍でも増え続けている。

このような場所が、子どもの育ち、孤独ではない子育て、張り合いのある高齢期の暮らしに必要な、と私は思う。

わたしの原風景

24

中川ひろたか

シンガーソングライター
絵本作家



イラスト／平澤朋子

生まれは、埼玉県大宮市。平屋建ての一軒家。山口県の周防大島生まれの両親から生まれた次男坊。四つ上の兄貴がひとり。親父は国鉄職員。広島の電力区から鉄道の町・大宮にきた。もはや「移民」だ。当時すごいことだったろうと思う。そのあと、長男だった親父を頼りに、兄弟たち、果てには父親までもが島から大宮にきた。親父はその面倒を見なきゃならない。「お前が生まれた時、家に三人増えた」って。母は今でもプンプンだけど、ぼくは島からやってきた、おじいちゃんが好きだった。お風呂に入って、肩と肩甲骨の間にできる窪みにお湯を入れて遊んだ。床屋さんこつこつと言って、おじいちゃんの坊主頭をくしでとかしたりした。ひらがなの木札で遊んでたら、いつのまにか「ひ・ろ・た・か」って並べたと言って「天才」呼ばわりされた。

たまに銭湯に行く。長く伸びる電信柱の影に悪い人が隠れてるから気を付けると兄貴に言われる。震えるほどこわかった。

隣の家で鳩を飼っていた。すごい数の鳩がいた。野球のボールが草むらに転がって取りに行ったら、ボールの隣に、鳩の死骸があった。

のら犬がいて、近所の子みんなで飼おうということになった。名前を「ベック」と名付けたが、幼稚園から帰ったら、もうベックはいない。親に聞いても「さあ」って言うばかり。

天ぷらをあげている母親に「おいも買ってきて」と言われ、じゃがいもを買って来ると「さつまいもに決まってるでしょ」とひどく叱られた。

二年生の時に、おじいちゃんは亡くなった。その日の朝、学校に行く時に「ひろちゃん」って呼ぶから、障子を開けると「お水ちょうだい」って。適当なコップが見つからないので寿司屋の湯呑みみたいなのに水いっぱい入れてあげた。重かったろうな。

学校を早退して家に着くと母親が「おじいちゃんはお爺さんになったのよ」って言うんだけど、まったく意味がわからなかった。顔に白い布がかぶせられていた。

BOOK

まるまる
信じてみることに森下
みさ子

かせいじんのおねがい

いとうひろし／作
定価1210円
(本体1100円＋税10%)

ちょっと想像してみよう……みんながお互いを信じ合って生きていて、だまし合ったり争ったりしない人たちのこと、そういう人たちで支え合っている社会のこと。「そんな社会はないよ」って言うてしまいそうになる。でも、子どもの頃は「そういうのがいいなあ」となんとなく思っていた気がする。目の前にいる子どもにはそういう人になってほしいし、これから子どもたちが生きる社会はそうあってほしいと心の奥では願っている。その思いが、この本の中では火星として現れ、火星の生き方として描かれている。

「ぼく」が町で偶然出会ったおじさんは、実は修行のために地球にやってきた火星だと告げる。火星はお互いを信じて仲良く暮らしているが、どうやら修行をするらしく、最高の修行というのがだまし合いや争いが蔓延^{まんえん}している地球で地球人として687日暮らすこと、その上でそんな社会に染まらずに火星に戻ったら元通り信じ合って生きることだという。「もともと なにもしないのと、だましたりあらそったりをしてて、そうしないのとはずいぶんちがう」ということらしい。これはなかなかむずかしい。特にだまし合いや争いが絶えないことを知っていて「そんなもんだよ」と諦めがちな大人にとっては、子ども以上に心に刺さる、いや、刺さらねばならない言葉だ。身近でも起こっているだまし合いや争いに気づき始めた子どもたちだけでなく、それに慣れてしまった大人たちが向き合うべき「ほんとうの願い」である。火星のおじさんの願いとは、子どもであれ大人であれ、おじさんが話す火星みたいな生き方があることを信じてくれることなのだ。そして、その願いはそんな生き方に「しびれる」ひとりの青年によってかなえられる。それで、おじさんは火星に帰っていくことができただろうか。結末は、この本を読んでみてのお楽しみ。

「ただの理想だよ」って跳ねのけるのではなく、これから生きていく子どもの心に立ち戻って信じることに、信じて願うことに、そんな現実を超えた大切なことを形にできるのが子どもの本の力だと思う。ただの理想でもなんでもなく、この本の中にはお互いを信じ合う火星人がいて、お互いに支え合って生きる火星という場所がちゃんとあるのだから。この本は子どもに与えて教えるのではなく、子どもといっしょに、もう一度「子ども」になって大人にも読んでほしい本である。読んで、火星の願いを、地球に生きる人間として考えてほしい。決して声高ではない、暖かさと柔らかさと面白さを抱えたお話と絵が、そんな読み方を支えてくれる。

(もりした みさこ／児童文化研究者、白百合女子大学教授)

11月の新刊図書！

願いがかなう自動はんばいき

ジャンケン必勝てぶくろ

山口タオ／作

たかいよしかず／絵

定価1100円（本体1000円＋税10%）



どこからともなくやってくる自動はんばいき。
商品は子どもの願いをかなえるふしぎなグッズ。
使い方はあなた次第い……。

単行本図書

ひまりのすてき時間割

井嶋敦子／作

丸山ゆき／絵

定価1430円（本体1300円＋税10%）



はちゃめちゃんな毎日をたて直そうと、ひまりは
一步をふみだし、「ひまりのすてき時間割」を
書き始めた！

はんぴらり！ [増補新版]

④きけんなきけんな 鬼退治

廣嶋玲子／作

九猫あざみ／絵

定価990円（本体900円＋税10%）



節分の日。武と鈴音丸は豆まきに大はりきり。
ところが、邪悪な鬼、黒妖鬼がおそいかかって
きて大変なことに……。

今まであまり気にしなかったカラス……鳴き声
すると姿を捜してしまいます。ちょっとせつなく
て、でもいとおしい。カラスが気になり始めまし
た。自然界の生きものが大好きになる、良い本に
ていました。

（東京都 S・O 七二歳）



ノンフィクション・
生きものって、おもしろい！
カラスのいいぶん
人と生きることをえらんだ鳥
嶋田泰子／著
岡本順／絵
定価1320円（本体1200円＋税10%）

読者の声

死をテーマに扱った身近な本……ありそうでな
った大切な一冊となりました。まだ小さくして
人の死（祖父母の死）をおぼえていない我が家の
子どもたちにも、あたりまえの死の訪れと、それ
を迎える家族の物語を伝えたくて購入しました。
何でもないときにふと読んでおきたいです。

（東京都 M・Y 三九歳）



童心社のおはなしえほん
みどりバアバ
ねじめ正一／作
下田昌克／絵
定価1540円（本体1400円＋税10%）

幼稚園児の頃、姉の小学校の教科書を読んで、ク
マさんの気持ちを考えたことがあり、楽しかった
です。十歳で、クマが「ウーファー」といって困っ
ているところで、私は「いちごが食べたいうて言
っているんじゃない？」と言ったことを今でも覚
えています。本当は違うと思うのですが、これを
読むときそのときの想像力を思い出します。神沢さ
ん、すばらしい物語をありがとうございます。

（神奈川県 K・S 四〇歳）



秀作絵本シリーズ
いちごつみ
神沢利子／ぶん
平山英三／え
定価1320円（本体1200円＋税10%）

2021年11月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第690号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹・扇麻子

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込
用紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただけます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●世の中トゲトゲした人が多いなと
思う反面、記憶を辿ると奇怪なくらい
親切な人も大勢いたなと思ひ至ります。
1度満員電車で失神し倒れた時も
驚異のスピードで周りの人達が助け
起こしてくれました。酔っ払って力尽
き蹲って寝ていたら見ず知らずの人
がおんぶして家まで送ってくれたこと
もありました。周りを気遣う余裕を失
いがちな己を鑑み反省しきりです。◎

●先月の衆院選の投票率は、戦後3
番目に低かったそうです。政治がも
っと近くなり、自然と参加できるよ
うになるにはどうすれば良い
か——「政治に無関心でいられても、
政治に無関係ではいけない」こと
がもっと広く共有されるべきなの
でしょう。子どもに向けて本を作っ
ているものとして、その責任を果た
していかなければと思います。①